

弁護士である前に、ひとりの人。  
依頼者にとって、頼れる人でありたい。

代表社員 平松剛

弁護士らしくない、それが、その人の第一印象だ。

彼の名は平松剛。自身も弁護士でありながら、全国に14の事務所を構え、1000人余りの従業員を擁する平松剛法律事務所の代表でもある。

スマートでありながら、どこか豪胆。時折ユーモアを交えて軽やかに話す平松は、経歴からして少し変わっている。

「大学卒業後、様々な仕事をしながら司法試験の勉強をしていた時、労務管理がずさんな会社で働いていて。労働基準法が守られずに過酷な労働を強いられる現場に疑問を持つたんです。だから、弁護士を立てずに自ら訴訟を提起して、私の主張がほぼ全面的に認められました。そこからですね、労働問題に強い弁護士になろうと決意したのは」

司法試験に合格してからも、既存の法律事務所には所属するのではなく、司法修習を経てすぐに弁護士として独立。当時の弁護士業界では珍しかったホームページを開発した。そのおかげか依頼が途絶えることなく、マンションの1室・従業員0人から始まった事務所は、右肩上がりで成長する。

「営業の仕事をはじめ、一般的な司法試験受験生はしないと思われる経験を色々としていたのですが、それがすべて役に立ちました。この業界には同じ事務所内でも弁護士のことを「先生」と呼びあがり習慣がありました。私も最初は「先生」と呼ぶのが自然な感覚がなくて、それを私に押しつけて、開業しては「ごく自然なクライアントファーストの精神を持つてほしい」と、私の事務所内ではそう呼ぶことを禁止したんです。平松剛法律事務所では、弁護士は普通に「さん」付けで呼ばれるし、事務員と弁護士の間の壁もあまりない。内部のスタッフも同様に、依頼者との関係も、お互いを人間として尊重することがすべての基本だ。

「人を採用する基準も、いい人、かどうか。常識があるのはもちろん、正直な人、自分自身に誠実な人に魅力を感じます。素朴な人間としての感覚、人間らしさを大切にできる、そういう人でないと依頼者に共感し、依頼者から信頼されることは難しいと思います」

欧米に比べると訴訟件数が圧倒的に少ない日本。現状では一般の人々と弁護士との間隔は薄いかも知れないが、今後、平松剛法律事務所はどのような存在になつていくのだろうか。

「やっぱり、依頼者にとって信頼できる人のような存在でありたい。日本人だけでなく外国の方にとっても、信じられるパートナーというか。理不尽なことがあつたら、まずは共感して、一緒に立ち向かうような人になつていきたいですね」

法律のスペシャリストとして、ひとりの人間として。

弁護士も法律事務員も、あなたと同じ目線に立つて。

人間としての感覚を大切に、嘘のない態度で、あなたに耳を傾け、真摯に向きあいたい。人生において、どうにもできない問題を抱えたときに。

平松剛法律事務所は、心から信頼できるパートナーとして、全力で解決にあたります。

人として、人と向きあう。

平松剛法律事務所